

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

July 2022 vol.35



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」
参照項としてのストックレー邸

特別展「受贈記念 彫刻家・澄川喜一の仕事」
グラントワの神獣と宝

関連事業
閉じた本の中から—「ミュージア」で時空を越える

35



ピエールシャロー「ホール」[フランス室内装飾] 1925年 豊田市美術館



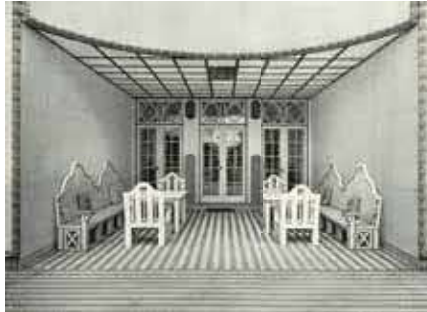
ピエールシャロー《フロア・スタンド「修道女」》
1923年 東京国立近代美術館

「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」

2022年9月17日(土)～11月28日(月) 途中展示替えあり(前期:～10月24日/後期:10月26日～)
休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



A



B



C

A.「ストックレー邸(通り側のファサード)」『近代的建築様式』 1914年1月号より

B.「ストックレー邸(庭園ホール)」『近代的建築様式』 1914年1月号より

C. 撮影:エドワード・スタイクン、ドレス:ポール・ボワレ「服飾芸術」『アール・エ・デコラシオン』 1911年4月号より

参照項としてのストックレー邸

「交歓するモダン 機能と装飾のポリフォニー」展は、1900年代半ばから30年代までのフランス、ドイツ、ウィーン、また同時代の日本のデザインの動向に目を向ける展示会である。この時代を機能主義、あるいはモダンデザインの原点として取り扱う言説において、これまで装飾は一過性の享樂的で表層的なものとして批判的・対立的に扱われる事が多かったが、寧ろ機能主義的な作例が生み出されるその傍らで、装飾が様々な状態で「機能」し続けてきた状況を、家具や書籍、写真、衣服など、国やジャンルを横断しつつ作例を参照することによって、示そうとする企画である。この時代はまた、鉄道や自動車が発達し、あるいは巨大企業の出現により地方から出てきた人々が都市を大きくするなどするなかで、人や情報が国を超えて混ざり、同期するようになった時とも言える。アーティストたちはそうした中で積極的に協働し、あるいは互いを引用することを通して、新しい表現を模索した。

ヨーゼフ・ホフマン (Josef Hoffmann, 1870-1956) が中心的な役割をになったウィーン工房 (1903-1933) は、この時代、建築、インテリア、ファッションなど多方面に影響を持った代表的な存在と言える。イギリスで興ったアーツ・アンド・クラフツ運動

の理念を引き継ぎ、生活と芸術を一致させようと総合芸術の実践を掲げた職人集団で、建物からカトラリーやドレスに到るまで生活に関するあらゆるものを手がけた。その理念を凝縮したものとして1905年に着工、1911年にスイス・ブリュッセルに完成したストックレー邸(図A、B)は、多くの著名人が訪問し、特にフランスのファッションデザイナーのポール・ボワレ (Paul Poiret, 1879-1944) や、ボワレのアトリエ兼ショップの内装を手がけたルイ・シュー (Louis Süe, 1875-1968)、そして施主であるストックレー (Adolphe Stoclet, 1871-1949: 銀行家で美術品収集家だった) の甥に当たるロベール・マレ＝ステヴァン (Robert Mallet-Stevens, 1886-1945) などの作品に直接的な影響を与えた。垂直水平を基本とする構造と、それを強調するかのようには施された装飾は、一貫したデザイン理念で成立していた。

ボワレはシューを連れて1910年頃ストックレー邸を訪問し、翌年には自らも衣服のみならずインテリアを手がけるようになる。空間全体を総合的にプレゼンテーションするシステムを敷くなかで、役割を果たしたのがアトリエ兼ショップだった。ボワレは当時まだアーティストのアトリエをいくつか手がけていたにすぎなかったシューに、ボワレ自身との

協働で18世紀の建物を改装させていた。ショップは09年10月にすでにオープンしていたが、アトリエと邸宅部分は引き続き改装したのだろう、1911年になってから、ストックレー邸の影響が看取される大広間がプレゼンテーションに使われるようになる。美術雑誌(図C)や、同年刊行のボワレの作品集に掲載の図版にその様子が確認でき、縁に飾り線をつけた扉、幾何学的な形の壁面装飾などに、引用が見られる。

マレ＝ステヴァンは1912年に手がけた、フランスのファッションデザイナー、ジャンヌ・パキヤン (Jeanne Paquin, 1869-1936) のニューヨークの店や、14年に手がけた彼女の邸宅の玄関ホールの内装に、ストックレー邸のキッチンに用いられた市松模様の床、幾何学的な形状の装飾を採用した。マレ＝ステヴァンは、その後建築家としてもウィーン工房およびホフマンに対する共感を持ち続け、構造と装飾との一致を、表面装飾を削ぎ落とす方向で深めていった。一方のシューはその後室内装飾とインテリアデザインに方向性を見出す。ホフマンのスタイルを素材の色柄やテクスチャーを活かした装飾の様式として消化し、自らもそうした装飾を得意としていった。

(廣田理紗 当館主任学芸員)

「受贈記念 彫刻家・澄川喜一の仕事」

2023年2月4日(土)～4月3日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

特
別
展



図1

図1. 澄川喜一《OROCHI》 2005年
島根県芸術文化センター

図2. 澄川喜一《OROCHI》 2005年
島根県芸術文化センター 撮影:筆者

図3. 澄川喜一
デザイン監修した東京スカイツリー®と作品《TO THE SKY》の前で
撮影:内海敬晴



図2



図3

グラントワの神獣と宝

ここに来る人は皆ご存じだろう。島根県芸術文化センターの正面玄関には、「おろち」が鎮座し、来館者をお迎える。顔は怖いけど、どこかユーモラスで柔和な表情を浮かべた、石で出来た彫刻である(図1)。晴れた日の休日など、子どもたちがS字の背中部分にのっかったり、石の手触りを楽しんだり。周囲の芝生で遊ぶ子もいて、楽しそうな笑い声が周囲に響き渡る。しかし、この「おろち(作品名OROCHI)」。実はもうひとつ、昼とは全く異なる「夜」の顔があるのをご存じだろうか。センターが閉館した後、道路に車や人の気配が少なくなる頃合い。ある一定の時間帯だけであるが、暗闇のなか、ライティングされた「おろち」の白い造形がぼんやり浮かび上がる(図2)。それは喧噪が去った日常風景のなかでは異質だが、なぜかとても神々しく、建物を守る神獣のごとく、光に反射してきりとS字の美しいカーブを見せている。昼間の柔和な表情とは全く違う、近寄りたささを感じる硬質の美しさである。…といってもこれは筆者個人の見解で、彫刻は光によって様々に表情を変えるので、他の人にはまた違って見えているかもしれない。しかし帰り道や夜の散歩の途中、その姿には幾度となく勇気づけられてきた。開館して17年、この彫刻が街

の風景に溶け込み、ひとつのシンボルになっていることを筆者は日々実感している。

前置きが長くなったが、この「おろち(作品名OROCHI)」の作者こそ、彫刻家澄川喜一(1931年吉賀町生まれ)である(図3)。島根県は、2020年度および2021年度、同氏の彫刻作品と関係資料の寄贈を受けた。生まれ育った故郷へ感謝と恩返しの気持ちを込めて、作家本人から寄贈されたものである。このうち彫刻作品は120点あり、数では全国の美術館でも随一の澄川コレクションとなる。なかには、1958年頃の、制作をスタートさせた初期の具象彫刻から、人生のライフワークとも言えるテーマ「そりのあるかたち」をより進化させた2021年の近作までが含まれ、60年以上にわたる制作の軌跡が辿れる作品群となる。

今回特に注目したいのは、これらの作品とともに寄贈された膨大な数の資料類である。主にスケッチブックやデッサン、屋外彫刻の図面や下絵、マケット、石膏原型など。また彫刻以外の絵画やデザインの仕事、澄川自身が収集していたアフリカの仮面や他作家の作品なども含まれ、その種類は多岐にわたる。現在、当館では、特別展での公開準備とともに、その膨大な資料類の整

理と調査を進めているが、スケッチブックについては、前回のニューズレター vol.34の記事、的野克之「デッサンとスケッチから紐解く創作の秘密」で詳しく紹介されているのでそちらをご覧いただきたい。そこでも触れられているが、資料からは今まであまり表にはでてきていない、澄川喜一の創作の過程の一端が窺える。それは想像も付かないような苦難と努力の遍歴であり、思わぬ発想の転換や柔軟さも垣間見える。今回の調査では、創作の秘密に少しだけ触れることが出来るかもしれない。

当館では、2015年に企画展「澄川喜一 シンプル・イズ・ビューティフル」を開催し、作家の生い立ちと共に、全国から作品を集めて、作風の変遷と魅力を紹介した。今回は、島根県に寄贈された作品群のお披露目を目的に、寄贈作品のなかから選りすぐりの彫刻作品と資料類を展示し、特に「澄川喜一の仕事」に焦点をあてた特別展を開催する。これを機会に、故郷を愛する澄川喜一の生み出す造形の奥深さ、美しさが伝わればと願う。

(左近充直美 当館専門学芸員)

コレクション展「没後100年記念 森鷗外とゆかりの画家たち」関連プログラム

ミュージア vol.19 「森鷗外没後100年記念 朗読の夕べ 文学と美術のあわいに」

2022年11月26日(土) 18:30開演

閉じた本の中から —「ミュージア」で時空を越える

美術館で書籍を展示する際には、挿絵や装幀を見せるのが主な目的となるため、本は閉じられていることが多い。

今春の企画展「竹久夢二と乙女たち」では夢二のグラフィックデザインにも注目し、彼が装幀を手がけた書籍を多数紹介した。そこには詩人でもあった夢二自身の著作も含まれており、本を開いて詩や文を見てもらうことができないのを残念に思った。短い詩ならば複製パネルなどで見せることはできるが、一定以上の分量になると「歩いて見て回る」展覧会という場になじまない。文学作品を展覧会で紹介するのは、なかなか難しい。

この課題の解決を試みた一つの例が、美術館と劇場の共同事業「ミュージア（ミュージアムシアター）」として開催した企画展関連コンサート「夢二の見た夢、その淡い」だ(図A)。夢二が表紙をデザインした「セノオ楽譜」は当然ながら表紙だけを見せる展示になる。そこで「中」の曲を演奏で聴いてもらおうと発案した。さらに打ち合わせの中で歌手の吉川真澄さんから、夢二の詩に新たな曲を書いてもらおうという提案があり、盛りだくさんのプログラムとなった。

この委嘱を受けた平野一郎さんは、作曲家の視点で9篇の詩を選び、それぞれ趣の異なる楽曲に仕上げた。童歌や民謡調の軽快な曲や、口ずさみやすい優しい曲もあるが、重く激しいピアノと共に、心の叫びのように言葉が発せられる曲もあり、一般に

いわれる「大正ロマン」のイメージとは異なる、洒落っ気、機転、鋭さ、孤独など、夢二の複雑な性質がたち現れてきた。

他人の解釈を交えず、ひとり静かに味わうのが純粋な詩の鑑賞だともいえるが、コンサートの観客の多くは、この機会がなければ夢二の詩集を紐解くことはなかっただろう。夢二の絵が飾られた側で、読まれることを待っていた詩が、音楽家の心と身体を通して音となり、私たちに届けられる。過去と現代のアーティストの共鳴する空間を提供できるのが、「ミュージア」の醍醐味といえよう。

ところで、2022年は石見出身の作家、森鷗外の没後100年にあたる。これを記念し、今年11月23日から来年1月29日まで、コレクション展「森鷗外とゆかりの画家たち」を開催する。鷗外と親交のあった画家の作品とともに、彼らが挿絵や装幀を手がけた鷗外の著作を展示するもので、やはり「閉じた本」が並ぶことになる。

出品作品の中に、鷗外の盟友、原田直次郎が表紙と挿絵を描いた小説「文づかい」がある。自身の留学体験を反映した「ドイツ三部作」の一つで、挿絵では主人公の風貌が鷗外に似せられている(図B)。物語は、留学中の日本人士官がザクセン王国の貴族の姫と出会い心を寄せるが、託された「文(手紙)」を届けた結果、彼女の意外な転身を知る……というもの。

同じ「ドイツ三部作」の「舞姫」と違って

あまり読まれていない作品なので、この機会に知ってもらいたいのだが、独特の擬古文で書かれていることもあり、「ちょっと立ち読み」というわけにはいかない。そこで「ミュージア」として朗読会を開催することとなった。

「文づかい」が初めて掲載された明治24(1891)年発行の叢書『新著百種』を展示する傍らで、声優の佐々木望さんがこの小説を朗読する。外国語のカタカナ表記や漢語など、私たちになじみのない言葉が多用されているため、耳できいて分かりやすい作品ではないが、鷗外が紡いだ言葉の響きやリズムが、時を越えどう表現されるかを味わっていただきたい。(字幕や解説を交えて進行するので、「国語の授業は苦手だった」という方も、どうぞご心配なく。)

響きといえば、鷗外は「文づかい」でヒロインが演奏するピアノの音色さえも言葉で描写している。彼が19世紀末のドイツで聴いたピアノは、どんな調べだったのだろう。興味のある方は、ピアノと調律の歴史を紐解き、古典調律と現代使われている「平均律」とを聴き比べる9月23日開催の「ミュージア vol.18」(企画展「機能と装飾のホリフォニー」関連プログラム)に参加いただきたい。

文学、美術、音楽と幅広い芸術を愛し、海外にも目を向けた先達、鷗外の故郷で、今後も複合的な表現活動を展開してゆきたいと思う。

(川西由里 当館専門学芸員)



A



B

A. ミュージア vol.17 コンサート「夢二の見た夢、その淡い」
2022年5月28日 ソプラノ=吉川真澄、ピアノ=水戸見弥子

B. 原田直次郎「文づかい」挿絵(『新著百種』第12号)
1891年 当館蔵